

北京共同ゼミ 「日本学研究—古典研究の現在—」	
日 時	2008年10月20日—25日
会 場	北京外国語大学北京日本学研究センター（中国・北京市）
参加者	平野由紀子（お茶の水女子大学教授）、伊藤美重子（同准教授） 施旻、深田弥生、高橋秀子、小島明子、黄韻如、三瓶はるみ （以上、本学博士課程学生）

上記合同ゼミは、天高く槐の木の黄に染まる十月下旬、北京日本学研究センターにおいて開催された。同センターにおいて、教員三名（張龍妹、伊藤美重子、平野由紀子）の講演のほか、十二本（潘蕾センター講師及び院生）の発表があり、約二十名の研究者・院生の参加があった。すべて日本語で行われた。同センターの日本文学、日本文化を専攻する学生五名とお茶の水女子大学の大学院生六名による研究発表は以下のとおりである。

(1) 北京日本学研究センターの院生の発表	
① 倪 錦丹	『竹取物語』の物語性—「月」をめぐって
② 劉 紹晨	「忍恋」の展開—『堀河百首』から『新古今和歌集』まで
③ 陳 燕	皇女と文学—平安朝齋院文学圏と初唐公主文学圏へのアプローチ
④ 趙 文珍	紫の上の嫉妬
⑤ 呉 爽	草庵茶室の成立と隠逸思想の関わり

①②④はそれぞれ、竹取物語の研究史、平安和歌及び題詠の研究史、源氏物語の研究史を充分ふまえたうえで、作品理解に新見を加えたものであった。③は、一見相似るサロンの主である日中の皇女をとりあげる。平安時代、自らが歌を詠み歌合を盛んに開催した齋院に対し、『全唐詩』に残る当時の遊宴詩を主催公主別に析出し、詩を詠じない公主のもとへ男性文人達が足を運んだことを指摘し、その意味を考察した。女性と男性、政治と文学、など壮大な日中比較文化論となる博士論文を予期させた。また⑤は日本近世初期の草庵茶室を、建築の系譜と中国の隠逸思想の日本人による受容「市中隠」の観念の二点から考察した。

(2) お茶の水女子大学の院生の発表	
⑥ 小島 明子	日本詩論の成立と『文鏡秘府論』
⑦ 三瓶はるみ	論争するすずめ—敦煌故事賦と御伽草子から
⑧ 黄 韻如	中国の染織意匠と日本—伝徳川頼宣所用の陣羽織について

⑨ 高橋 秀子	「すずし」の考察—平安時代の人々の信仰と内面
⑩ 深田 弥生	源氏物語の語りの方について
⑪ 施 旻	『蜻蛉日記』の成立について

⑥は空海のこの著作をめぐって日本の詩論の中で言及されなかったのはなぜかを考察、⑦は日中の民間の物語の中での雀の描かれ方を比較、⑧は明代の舶来裂と見られる陣羽織の桃文様についての考察。⑨以下は平安文学専攻の院生だが、⑨は出家後の境地を「すずし」と形容する表現の出現をめぐり、11世紀初頭の源氏物語での往生に成功した者のないことの意味を考察、⑩は語りの視点の分裂と解されてきた「宿木」巻の語りについて新たな仮説を提示、⑪は蜻蛉日記の序文の表現を洗いなおし作品理解に新しいパラダイムを提供する新見を提出した。2)には台湾および中国からの留学生が含まれる。この留学生たちと1)の院生の問題意識やその語学力の高さに、日本語を母語とする院生たちは深い感動を覚えた。参加者は平安文学の研究方法や対象への迫り方を知り、日本に深く浸透する中国文化の研究の現場に居合わせる刺激を受け、各自このジョイントゼミから得た収穫には大きなものがあったといえる。

このゼミを実現するに当たり、北京日本学研究中心の先生方にお世話になった。深い感謝を捧げる。特に張龍妹先生に厚く御礼申し上げる。

【文責：本学教授 平野 由紀子】

